

# 東洋哲學に於ける認識研究 (承前)

青 木 晦 藏 稿

## 三、王子の觀念論

(一)、觀念論起因 朱子の實在論的認識論に反對して觀念論的認識論を倡へたものは、明の王陽明その人である。王陽明の學説はもと朱子と同時代の陸象山より來たもので、陸象山の認識上に於ける議論は朱子の實在論に似たる所があつたことは、朱子の實在論で述べたるが如くであるが、然しその間には頗る朱子と異なる所あつて觀念論者と見るべきものである。故に余は陸象山を以て客觀的觀念論と見て居る。王陽明の學説は陸象山の學統を承けてをるものであるから、認識論も矢張り陸象山の説を繼承して觀念論者となつたのは當然のことであるが、陽明の觀念論は陸象山の觀念論よりはその色彩が一層濃厚になつて主觀的觀念論といふべきものになつた様に思はるのである。此の點は西洋哲學に於ける認識論の發展とは頗るその過程を異にして居る所がある。西洋では主觀的觀念論の方が前に出て客觀的觀念論が後に起つてをる。然るに東洋に於ては陸象山の客觀的

觀念論が前に出て陽明の主觀的觀念論が後に起つて居る。此には種々の原因のあることであらうと思はるゝが主要なる原因は左の如くではなからうか。陽明に在りては陸象山が心即理言ひ換ふれば理は我が觀念に存するもので觀念を除いては理がないといふ議論を倡へながら、朱子と同様に理を以て客觀に實在するが如き口吻を以て此理在<sub>二</sub>宇宙間。固不下<sub>二</sub>以<sub>二</sub>人之明不明行不行<sub>二</sub>而加損<sub>上</sub>。といひ、此理充<sub>二</sub>塞宇宙。天地鬼神且不能<sub>二</sub>違異<sub>一</sub>。説於<sub>二</sub>人乎<sub>一</sub>といひ、塞<sub>二</sub>宇宙<sub>一</sub>一理耳。學者之所<sub>二</sub>以<sub>二</sub>學<sub>一</sub>、欲明<sub>二</sub>此理<sub>一</sub>耳。此理之大。豈有<sub>二</sub>限量<sub>一</sub>などゝいつて居るのは頗る不徹底たるを免れぬ。心即理といふ觀念論を取るならば理を以て客觀に存在するが如く認むる實在論に近き思想を棄て、理を以て主觀に存在するものと認むる部分のみを取らなくてはならぬ。彼の思想を棄て、此の思想のみを取りて始めて眞の觀念論即ち心即理の説が成立するものであると認めたのが陽明の主觀的觀念論を立てた一原因ではあるまいか。陽明が陸象山に就ての左の如くいつて居る所は其消息を見るべきである。

問陸子之學何如。先生曰。濂溪明道之後。還是象山尺還粗些。九川曰。看<sub>二</sub>他論<sub>一</sub>學。篇々説<sub>二</sub>出骨髓<sub>一</sub>。句々似<sub>二</sub>鍼膏肯<sub>一</sub>。卻不見<sub>二</sub>他粗<sub>一</sub>。先生曰。然。他心上用<sub>二</sub>過功夫<sub>一</sub>。與<sub>二</sub>揣摩依倣求<sub>二</sub>之文義<sub>一</sub>。自不<sub>レ</sub>同。但細看有<sub>二</sub>粗處<sub>一</sub>。用<sub>二</sub>功夫當見<sub>レ</sub>之。(傳習錄卷下)

象山を以て粗なる處があるといふのは象山の如何なる處を言つたのであるか正確に知ることは出來ぬが或は觀念論の不徹底を意味したのもその一ではなからうかと思ふ。且陽明が象山文集序に於て

有<sub>二</sub>象山陸氏。雖<sub>二</sub>其純粹和平若<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>及<sub>二</sub>子<sub>一</sub>。(周濂溪程明道)簡易直截。真有<sub>二</sub>以接<sub>三</sub>孟子之傳<sub>一</sub>。其議論開闔。時有<sub>レ</sub>異者。乃其氣質意見之殊。而其學之必求<sub>二</sub>諸心<sub>一</sub>。則一而已。故吾嘗斷以<sub>二</sub>陸子之學孟子之學也<sub>一</sub>。

といへる所を見ても陽明が陸象山の學の之を心に求むる所を取つておるのが知り得らるゝのである。而して陽明の觀念論は此の點に於て陸象山の如き不徹底な粗略な議論でなく頗る精密で且徹底したるものと謂つて宜しいやうに考へらるゝのである。余はその議論を取ると取らぬとに關せず、陽明の議論の精緻明晰なるに感服するものである。然し陽明が主觀的觀念論を倡ふるに先だちて楊慈湖といふ主觀的觀念論者の有つたことは見逃がすべからざるものである。楊慈湖はその著己易に於て左の如く言つてをる。

易者己也。非<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>他也。以<sub>レ</sub>易爲<sub>レ</sub>書。不<sub>二</sub>以<sub>レ</sub>易爲<sub>レ</sub>己不可也。以<sub>レ</sub>易爲<sub>二</sub>天地之變化<sub>一</sub>。不<sub>二</sub>以<sub>レ</sub>易爲<sub>レ</sub>己之變化<sub>一</sub>不可也。天地我之天地。變化我之變化。非<sub>二</sub>他物<sub>一</sub>也。

夫所<sub>二</sub>以爲<sub>レ</sub>我者。母<sub>レ</sub>曰<sub>二</sub>血氣形貌而已<sub>一</sub>也。吾性澄然清明而非物。吾性洞然無際而非量。天者吾性中之象。地者吾性中之形。故曰在天成象。在地成形。皆我之所<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>也。混融無<sub>二</sub>内外<sub>一</sub>。貫通無<sub>二</sub>異殊<sub>一</sub>。觀<sub>二</sub>一書<sub>一</sub>其指昭々矣。

舉<sub>二</sub>天地萬物萬化萬理<sub>一</sub>。皆一而已矣。舉<sub>二</sub>天地萬物萬化萬理<sub>一</sub>。皆乾而已矣。坤者乾之兩。非<sub>二</sub>乾之

外復有<sub>レ</sub>坤也。震巽坎離艮兌。又乾之交錯散殊。非<sub>レ</sub>乾之外復有<sub>レ</sub>此六物也。皆吾之變化也。不<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>天地萬物萬化萬理爲<sub>レ</sub>己。而惟執<sub>レ</sub>耳目鼻口四肢爲<sub>レ</sub>己。是割<sub>レ</sub>吾之全體。而製<sub>レ</sub>取分寸之層也。是梏<sub>レ</sub>于血氣。而自私也。自小也。(宋元學案卷七十四)

此等は象山の心即理を擴充したるもので、天地の變化を以て我の變化となし、天地萬物萬化萬理を以て自己の天地萬物萬化萬理とする所は、確に主觀的觀念論と見て誤りはないと思ふ。陽明は楊慈湖に對して如何なる態度を取りたるかは明白でないが、左の言に據れば必ずその思想の感化を享けた所があつたことは間違あるまい。

楊慈湖不<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>無<sub>レ</sub>見。又著<sub>レ</sub>在無<sub>レ</sub>聲無<sub>レ</sub>與上<sub>レ</sub>見了。(傳習錄卷下)

楊明の主觀的觀念論と慈湖の主觀的觀念論とは如何にもよく似たる所があることは何人も否むことは出來ぬ。唯慈湖の論は高處に上りつめた點はあるが、陽明の如く再び平易に復りたる點がない様である。此が慈湖と陽明との差異點であらうと思ふ。

以上述ぶるが如く陽明の主觀的觀念論は大體に於て陸象山楊慈湖の思想を繼承して徹底せしめたが、それと同時に大に朱子の實在論に反對して辯難攻撃に至ざる所なきの觀があつた。此は如何なる原因に依りて然りしものであるか。必ずそこに何等か原因がなくてはならないと思ふ。朱子の認識論の最終の目的は主客一致の所に在つたことは疑ふべからざるもので、その間に何等の矛盾も衝

突もない。然し客觀世界に理の實在を認むる所より見れば、主觀世界を客觀世界と別々に理の存在して居るが如く見える點がないでもない。能く朱子の學説を了解して居るものより見れば、かゝる誤解のあらう筈はないが、朱子學に對して一知半解せる徒には動もすれば、主客對立して別々のものであると見る弊に陥るを免れぬ所がある。明代の儒者の中には此の弊に陥つたものも多少有りしに相違ない。羅整庵の如き朱子學の大家ですらその著困知記及び羅整庵存稿を見れば朱子に對する誤解が少くなかつた様に思はるゝ節がある。陽明の次「鄒謙之韻」の詩に

久奈<sup>三</sup>世儒橫<sup>二</sup>臆說<sup>一</sup>。競搜<sup>二</sup>物理<sup>一</sup>外<sup>二</sup>人情<sup>一</sup>。

といふのがある。朱子の説は決して競うて物理を搜りて人情を外にするものではない。寧ろ物理のみを搜りて人情を外にするのを戒めてをる。故に朱子がその門人陳齋仲に答へて

爲<sup>二</sup>格物之學<sup>一</sup>。不<sup>下</sup>窮<sup>二</sup>天理人倫<sup>一</sup>。講<sup>二</sup>聖言<sup>一</sup>。通<sup>中</sup>世故<sup>上</sup>。乃<sup>九</sup>然存<sup>二</sup>心於一草木一器用之間<sup>一</sup>。是何學問。  
如此而望<sup>レ</sup>有<sup>レ</sup>所得<sup>一</sup>。是炊<sup>レ</sup>砂而欲<sup>レ</sup>成<sup>レ</sup>飯也。(朱子文集)

といつてをる所を見ても明瞭である。陽明も此の位のことの分らぬ筈はないが、當時此の弊の在所を見ると同時に、自己はかねて陸象山の説に負ふ所があつて既に一家の成見を有して居り、且一旗幟を樹立して當時の學界を風靡せんどの考もあつたので、遂に朱子の反對に出でたものではあるまいか。その反對の動機の如何は姑く之を措き、朱子の實在論と王子の觀念論とは東洋哲學に於ける

一大偉觀であることは争ふべからざることである。今日二家の説を比較して研究することは東洋哲學末開の天地を開拓することにもなり、非常に興味あること、思ふ。

(二) 心即理の義。

陽明は朱子が心外に理を認めて心と理とに分析したるに對しては、大に不満であつて反對したものである。陽明が陸象山を紹述して心即理を力説したのも朱子の此の説に反對であるからである。故に先づ朱子に反對した點より述べなくてはならぬ。

朱子所謂格物云者。在<sub>三</sub>即<sub>レ</sub>物而窺<sub>二</sub>其理<sub>一</sub>也。即<sub>レ</sub>物窮理。是就<sub>二</sub>事々物々上<sub>一</sub>。求<sub>二</sub>其所謂定理<sub>一</sub>者也。是以<sub>二</sub>吾心<sub>一</sub>。而求<sub>二</sub>理於事々物々之中<sub>一</sub>。析<sub>二</sub>心與理而爲<sub>二</sub>一<sub>一</sub>矣。夫求<sub>二</sub>理於事々物々<sub>一</sub>者。如求<sub>二</sub>孝之理於其親<sub>一</sub>之謂也。求<sub>二</sub>孝之理於其親<sub>一</sub>。則孝之理。其果在<sub>二</sub>於吾之心<sub>一</sub>邪。抑果在<sub>二</sub>於親之身<sub>一</sub>邪。假而果在<sub>二</sub>於親之身<sub>一</sub>。則親沒之後。吾心遂無<sub>二</sub>孝之理<sub>一</sub>歟。見<sub>二</sub>孺子之人<sub>一</sub>井。必有<sub>二</sub>惻隱之理<sub>一</sub>。是惻隱之理。果在<sub>二</sub>於孺子之身<sub>一</sub>歟。抑在<sub>二</sub>於吾心之良知<sub>一</sub>歟。其或不可<sub>三</sub>以從<sub>二</sub>之於井<sub>一</sub>歟。其或可<sub>三</sub>以手面援<sub>二</sub>之歟。是皆所謂理也。是果在<sub>二</sub>於孺子之身<sub>一</sub>歟。抑果出<sub>二</sub>於吾心之良知<sub>一</sub>歟。以<sub>レ</sub>是例之。萬事萬物之理。莫<sub>レ</sub>不<sub>二</sub>皆然<sub>一</sub>。是可<sub>レ</sub>以知<sub>中</sub>析<sub>二</sub>心與理爲<sub>二</sub>一<sub>一</sub>之非<sub>上</sub>矣。夫析<sub>二</sub>心與理而爲<sub>二</sub>一<sub>一</sub>。此告子義外之説。孟子之所<sub>二</sub>深關<sub>一</sub>也。(傳習錄卷中)

陽明の此の議論はその著書の中に屢々繰り返されてあるが、他處に見ゆるものもその議論の要旨は此と異なる所はないから。他を引用することを止めやう。此は朱子の實在論の處でも一寸述べて

置いたが此の議論はもと朱子が人之所<sub>二</sub>以爲<sub>一</sub>學。心與<sub>レ</sub>理而已矣といつた所より起つたものであるが、朱子は理は事々物々に定理があるとのみ言つたのではなく心の體にも是の理を具へておるものであると云つておる。故に朱子は

心之體具<sub>二</sub>乎是理<sub>一</sub>。理則無所<sub>レ</sub>不該。而無<sub>二</sub>一物之不<sub>レ</sub>在。然其用實不<sub>レ</sub>外<sub>二</sub>乎人心<sub>一</sub>。蓋理雖<sub>レ</sub>在<sub>レ</sub>物。而用實在<sub>レ</sub>心也。(朱子語類)

といつて居る。此の如く朱子は理は事々物々に存すると共に吾が心の體にも具はつて居るものであるから、主客一致によりてその理を認むることが出来るものと見ておるのである。故に孝の理が親の身に在り忠の理が君の身に在り惻隱の理が孺子の身に任りて吾が心に孝の理なく忠の理なく惻隱の理がないとは未だ嘗て言つたことはないのである。朱子の説によれば君父に在る理及び孺子に在る理と吾が心の理とが一致して此に孝の理忠の理惻隱の理が外に發露してそれらの行爲となるものと見るのである。陽明の説く所に據ると朱子は心の體に理が具はつてをることを更に認めないで唯理が事々物々の上にのみ存してをるのを認めたるが如く聞ゆるが、是は人の論の一端のみを見て他の一端を見ないで、自分獨り決めに決めて他を攻撃するものと言はねばならぬ。然し此は朱王子見解の異なる所より起りたる議論なれば姑く措きて陽明の所謂心即理の説を述べて見やう。

陽明といふ人は本來陸象山の心即理の説を紹述した人であるから、常に

心卽理也。天下又有<sub>二</sub>心外之事<sub>一</sub>。心外之理<sub>一</sub>乎。(傳習錄卷上)

心之體性也。性卽理也。天下寧有<sub>二</sub>心外之性<sub>一</sub>。寧有<sub>二</sub>理外之心<sub>一</sub>乎。(陽明文錄鈔卷五)

なごゝいつて居る。此等に類したる語は陽明全書の諸處に見えて居るが、皆同一の意味を有して居るもので、すべての理すべての事は我が觀念に存するものであつて我が觀念を除いて他には一も理又は事は存在しておらぬといふこと歸するのである。その詳しき説明はその門人徐愛との問答を見ればその要點を知ることが出来る。

愛問。至善只求<sub>二</sub>諸心<sub>一</sub>。恐於<sub>二</sub>天下事理<sub>一</sub>。有<sub>レ</sub>不能盡。先生曰。心卽理也。天下又有<sub>二</sub>心外之事<sub>一</sub>。

心外之理<sub>一</sub>乎。愛曰。如<sub>二</sub>事<sub>一</sub>父之孝。事君之忠。交<sub>レ</sub>友之信。治民之心。其間有<sub>二</sub>許多理在<sub>一</sub>。恐亦

不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>察。先生嘆曰。此說之蔽久矣。豈一語所<sub>二</sub>能悟<sub>一</sub>。今姑就<sub>二</sub>所問者<sub>一</sub>言之。且如<sub>二</sub>事父<sub>一</sub>。

不<sub>レ</sub>成<sub>下</sub>去<sub>上</sub>交<sub>上</sub>求<sub>中</sub>箇孝的理<sub>上</sub>。事君不<sub>レ</sub>成<sub>下</sub>去<sub>上</sub>君<sub>上</sub>求<sub>中</sub>箇忠的理<sub>上</sub>。交<sub>レ</sub>友治民。不<sub>レ</sub>成<sub>下</sub>在<sub>二</sub>友<sub>上</sub>上民

上<sub>二</sub>求<sub>中</sub>箇信與<sub>レ</sub>仁的理<sub>上</sub>。都<sub>レ</sub>只在<sub>二</sub>此心<sub>一</sub>。心卽理也。此心無<sub>二</sub>私欲之蔽<sub>一</sub>。卽是天理。不<sub>レ</sub>須<sub>二</sub>外面添<sub>二</sub>一

分。以下此純<sub>二</sub>乎天理<sub>一</sub>之心<sub>上</sub>發<sub>レ</sub>之事<sub>一</sub>。父便是孝。發<sub>レ</sub>之事<sub>一</sub>。君便是忠。發<sub>レ</sub>之交<sub>一</sub>。友治民。便是信與

仁。只在<sub>二</sub>此心<sub>一</sub>去<sub>二</sub>人欲<sub>一</sub>存<sub>二</sub>天理<sub>一</sub>上<sub>レ</sub>用<sub>レ</sub>功便是。(傳習錄上)

陽明は専ら本心を求むれば遂に物理を遺すの弊に陥ゐることはないかといふ疑に對しては

夫物理不<sub>レ</sub>外<sub>二</sub>於吾心<sub>一</sub>。外<sub>二</sub>吾心<sub>一</sub>而求<sub>二</sub>物理<sub>一</sub>。無<sub>二</sub>物理<sub>一</sub>矣。遺<sub>二</sub>物理<sub>一</sub>而求<sub>二</sub>吾心<sub>一</sub>。吾心又何物邪。心



之體性也。性卽理也。故有孝親之心。卽有孝之理。無孝親之心。卽無孝之理矣。有忠君之心。卽有忠之理。無忠君之心。卽無忠之理矣。理豈外於吾心邪。……心一而已。以其全體惻怛而言謂之仁。以其得宜而言謂之義。以其條理而言謂之理。不可外心以求仁。不可外心以求義。獨可外心以求理乎。外心以求理。此知行之所以二也。求理於吾心。此聖門知行合一之教。吾子又何疑乎。(傳習錄卷中)

といつて居る。此に據れば陽明がすべての理を以て吾が心に在りて物に在らずとする觀念論者であることは明かに知ることが出来る。然らば陽明が所謂理とは如何なる意義を有するものであるか。朱子は理には所當然の理(用)と所以然の理(體)とあることを説いて居るが、陽明には此の如く區別した所は見當らぬ。陽明に據れば所謂理には至善の意味がある。故に

至善只是此心純乎天理之極便是。(傳習錄上)

といつて居る。至善は吾人の最高の理想にして絶對の善なるものである。孔子の所謂仁の如きも人間最高の理想であるから勿論至善であり天理である。陽明は又良知を以て天理となしてをるものであるから、天理には良知の意味あることは疑のない所である。又上文にも擧げたるが如く、孝之理忠之理などをいへる所によれば、道德上に於ける諸種の理法法則の意味もあることは明白である。性を理といひ良知を天理といひ至善を理といふは畢竟その條理あるより名づけたものである。故に

陽明は以<sub>三</sub>其條理<sub>二</sub>而言謂<sub>三</sub>之理<sub>一</sub>といつて居る。以上述ぶる所によりて之を觀れば陽明の所謂理には本體上より見たる理と作用上より見たる理との二種の意味あることが知り得らるゝものである。卽ち性卽理也といひ良知卽天理也といひ至善純<sub>三</sub>天理<sub>二</sub>之極といふが如きは本體上よりいへるもので孝之理忠心理の如きは個々の作用上よりいへるものではあるまいか。理は本來一あるのみにして二あるものでないが、假りに區別して見るならばかく見らるゝものと思ふ。陽明に據れば理は一なれども現象界に在りては諸種に區別し得らるゝが、是れは皆吾人の觀念中に存するもので事物その物に實在してをるのではない。事物その物に理が實在してをるなどいふのは心と理とを分ちて二つにするもので支離の見解であるといふのである。此の見解は一面の眞理を捉へてをるもので全然否定することは出来ないが、然し全面の眞理であるとは認められないと思ふ。そは兎も角陽明の心卽理の説はもと大學の致知格物より來たものであるから、致知格物の説を明かにすれば心卽理の説も亦一層明白になると思ふから此にその説を述べて置く必要がある。陽明の致知格物の説は朱子とは大にその趣を異にしてをる點がある、朱子の所謂知は良知と知識とを合せたものであるが陽明の知は良知のみである。朱子の所謂物は客觀に存する事物であるが陽明の物は意念中に存する事である。此の如く解釋が異なるからその學說に相異の起るは當然のことである。陽明は左の如くいつて居る。

心者身之主也。而心之虛靈明覺。卽所謂本然之良知也。其虛靈明覺之良知。應感而動者謂<sub>三</sub>之

意。有知而後有意。無知則無意矣。知非意之體乎。意之所用。必有其物。物卽事也。如意用於事。親。卽事。親爲一物。意用於治民。卽治民爲一物。意用於讀書。卽讀書爲一物。意用於聽訟。卽聽訟爲一物。凡意之所用。無有無物者。有是意卽有是物。無是意卽無是物矣。物非意之用乎。(傳習錄中)

是に由れば陽明の所謂物は客觀に存するにあらずして意念中に存する物であることが明かである。陽明は更に格物と致知との關係を説いて

郡人之見。則謂意欲<sub>二</sub>溫清<sub>一</sub>。意欲<sub>二</sub>奉養<sub>一</sub>者。所謂意也。而未<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>謂<sub>二</sub>之誠<sub>レ</sub>意。必實行<sub>二</sub>其溫清奉養之意<sub>一</sub>。務求<sub>三</sub>自慊而無<sub>二</sub>自欺<sub>一</sub>。然後謂<sub>二</sub>之誠意<sub>一</sub>。知<sub>三</sub>如何而爲<sub>二</sub>溫清之節<sub>一</sub>。知<sub>三</sub>如何而爲<sub>二</sub>奉養之宜<sub>一</sub>者。所謂知也。而未<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>謂<sub>二</sub>之致<sub>レ</sub>知。必致<sub>下</sub>其知<sub>三</sub>如何爲<sub>二</sub>溫清之節<sub>一</sub>者之知<sub>上</sub>。而實以<sub>レ</sub>之溫清。致<sub>下</sub>其知<sub>三</sub>如何爲<sub>二</sub>奉養之宜<sub>一</sub>者之知<sub>上</sub>。而實以<sub>レ</sub>之奉養。然後謂<sub>二</sub>之致<sub>レ</sub>知。溫清之事。奉養之事。所謂物也。而未<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>謂<sub>二</sub>之格物<sub>一</sub>。必其於<sub>三</sub>溫清之事<sub>一</sub>也。一如<sub>下</sub>其良知之所<sub>レ</sub>知<sub>レ</sub>當<sub>三</sub>如何爲<sub>二</sub>溫清之節<sub>一</sub>者<sub>上</sub>而爲<sub>レ</sub>之。無<sub>二</sub>一毫之不<sub>レ</sub>盡<sub>一</sub>。於<sub>三</sub>奉養之事<sub>一</sub>也。一如<sub>下</sub>其良知之所<sub>レ</sub>知<sub>レ</sub>當<sub>三</sub>如何爲<sub>二</sub>奉養之宜<sub>一</sub>者<sub>上</sub>而爲<sub>レ</sub>之。無<sub>二</sub>一毫之不<sub>レ</sub>盡<sub>一</sub>。然後謂<sub>二</sub>之格物<sub>一</sub>。溫清之物格。然後知<sub>二</sub>溫清<sub>一</sub>之良知始致。奉養之物格。然後知<sub>二</sub>奉養<sub>一</sub>之良知始致。故曰物格而後知至。致<sub>下</sub>其知<sub>三</sub>溫清<sub>一</sub>之良知<sub>上</sub>。而後溫清之意始誠。致<sub>下</sub>其知<sub>三</sub>奉養<sub>一</sub>之良知<sub>上</sub>。而後奉養之意始誠。故曰知至而後意誠。(同上)

といつて居る。陽明の説に據れば吾人は只意念の中に映ずる理を認めただのみでは用を爲さないから意念の中の物の正しからざるを正し良知を致し意志を誠にし心を正しうせねばならぬのである。即ち知行合一でなくてはならぬのである。此れ陽明の學説の大意であるが此れ以上は認識編以外に涉るから此に述ぶることをやめやう。

陽明はかくの如くすべての理は吾人の觀念の中に存するものと見たがそれのみならず、總べての物質も矢張り吾人の觀念の中に存するものと見たのであるから、左の如くいつて居る。

先生遊南鎮。一友指巖中華樹問曰。天下無心外之物。如此華樹。在深山中。自開自落。於我心亦何相關。先生曰。爾來看此華時。此華與汝心同歸於寂。爾來看此華時。此華顏色一時明白起來。便知此華不在爾的心外。(傳習錄下)

此は一應理のあることであるが、吾人は此の華の客觀に實在して居るのを見るから我が主觀に映ずるのである。若し客觀に此の華が存在しておらねば我が主觀には何物もないではないか。然らば此の華の認識は主客一致によりて出来るもので主觀のみで此の華の認識は出来ないと同時に客觀のみでも認識は出来ないではないかといふ疑問が起きるべき筈である。少くも常識論から見て此の疑問の起るのは當然である。然し陽明の答は此の疑問を説明するには不充分であると謂はねばならぬ。陽明は亦左の如くいつておる所がある。

又問天地鬼神萬物。千古見在。何沒了。我的靈明便無了。曰。今看死的人。他這些精靈游散了。他的天地萬物。尙在何處。(傳習錄下)

此の問はその門人錢緒山であるが、緒山の論は天地鬼神萬物を以て客觀に存在するものと見た常識論である。然るに陽明の答は前の華樹の答と同一で主觀なければ客觀なしといふ意味を述べてをる。その論の正否は兎に角陽明の論は此までは何等の矛盾はない。何となればすべての理すべての事すべての物皆我が觀念に存在するもので客觀に實在しておるものでないといふことに於ては徹底しておるからである。陽明の心外理なし心外事なし心外物なしといふ論よりすればかくの如く説くのが當然である。又朱子の心と理とを分てるは不合理なりと論ずる所より見てもかくの如く説くのが當然である。然るに陽明は時に觸れて無意識的か有意識的か客觀界に理の存し物の存して居るが如き議論を爲せることが少くない。その一二の證據を舉げて見やう。

朱本思問。人有虚靈。方有良知。若草木瓦石之類。亦有良知否。先生曰。人的良知。就是草木瓦石的良知。若草木瓦石。無人的良知。不可爲草木瓦石矣。豈惟草木瓦石爲然。天地無人的良知。亦不可爲天地矣。蓋天地萬物。與人原是一體。其發竅之最精處。是人心一點靈明。風雨露雷日月星辰。禽獸草木山川土石。與人原只一體。故五穀禽獸之類。皆可養人。藥石之類。皆可療疾。只爲同此一氣。故能相通耳。(傳習錄卷下)

陽明の所謂良知は即ち天理であるから、天地にも草木瓦石にも天理が存してゐるものといふことになる。左に擧ぐる所も亦同一の意味である。

問人心與物同體。如吾身原是血氣流通的。所以謂之同體。若於人便異體了。禽獸草木益遠矣。而何謂之同體。先生曰。爾只在感應之幾上看。豈但禽獸草木。雖天地也與我同體的。鬼神也與我同體的。請問。先生曰。爾看這箇天地中間。甚麼是天地的心。對曰。嘗聞人是地的心。曰人又甚麼教做心。對曰只是一箇靈明。可知充天塞地中間。只有這箇靈明。人只爲形體自間隔了。我的靈明。便是天地鬼神的主宰。天沒有我的靈明。誰去仰他高。地沒有我的靈明。誰去俯他深。鬼神沒有我的靈明。誰去辨他吉凶災祥。天地鬼神萬物。離卻我的靈明。便沒有天地鬼神萬物了。我的靈明。離卻天地鬼神萬物。亦沒有我的靈明。如此便是一氣流通的。如何與他間隔待。(同上)

此の議論も前の議論と同一の論旨である。此に據れば陽明は天地鬼神萬物の客觀に實在してゐるのも天地鬼神萬物に我が虚靈明覺なる良知即ち天理と同じき靈覺を有してゐるのも認めてゐるのである。朱子も私の有する理と同一の理が宇宙に存してゐるを認めて居るものであるからその點より言へば朱子と陽明との間に何等の差異を認むることが出來ないではないか。若し陽明が客觀界に理の存在を認めたとすれば確かに

(一)陽明の此の説は陽明が大に力を奮つて朱子の客觀に理の實在を認めたとを攻撃して心と理とを析ちて二と爲すは告子義外の説なりといつた論と同一の論旨に陥りて自ら作つた陷穽に陥ちたるが如き觀がある。もし陽明が飽くまで心即理の説を以て押し通さんとするならば天地も草木瓦石も天理良知ありといふ説を棄てねばならぬことになる。さもなくば論旨が一貫しない。

(二)陽明が天地及び草木瓦石にも吾人と同じき天理ありとの説を押し通して理の客觀に存するを認めんとするならば心外の理なし心外の事なし心外の物なしといふ觀念論の立場を去りて實在論を取らねばならぬ。かくすれば陽明の特色は失せて朱子と同じき主客一致の議論になるであらう。實は陽明にも主客一致の論を取つてをるが如く思はるゝ點がある。外<sub>二</sub>吾心<sub>一</sub>而求<sub>二</sub>物理<sub>一</sub>。無<sub>二</sub>物理<sub>一</sub>矣。遺<sub>二</sub>物理<sub>一</sub>而求<sub>二</sub>吾心<sub>一</sub>。吾心又何物邪といひ、天地鬼神萬物。離<sub>二</sub>卻我的靈明<sub>一</sub>。便沒<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>天地鬼神萬物<sub>一</sub>了。我的靈明。離<sub>二</sub>卻天地鬼神萬物<sub>一</sub>。亦沒<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>我的靈明<sub>一</sub>といひ天地萬物與<sub>レ</sub>我一體といふが如きは主客一致の議論である。此の如く主客一致の論を立つるならば朱子と全く同一論旨であるから支離呼ばりまでして朱子を罵る必要はないではないか。

(三)此の如く陽明の論に矛盾の出來たのは陽明の知らず識らず陥つたのであるが、初めより意識して居つたのであるか。その點は明かに知るべからざるが何れにしても陽明の學說中の難點である。解釋如何によりては陽明の學說の一部が自らの矛盾によりて成立せざるとなる。余の知人中には陽

明は客觀に理を認めて居つた人で、陽明は未だ嘗て客觀に理なしといつて居らぬと主張するものがあるが、心外理なしといへば客觀に理なしといふことになるから、客觀に理なしといはずとはいへないであらうと思ふ。陽明學者以外のものより見れば陽明の説は矛盾せりといつて濟むが、何とか陽明の矛盾を矛盾とせずして説明すべき途がないであらうか。余は陽明自身に在りては何等矛盾せずして解釋して居つたものであらうと考へるのである。それはすべてを觀念論で押し通すとである。陽明の説を矛盾ないやうにするには此の途より外に取る所はないと思ふ。天地に良知あり草木瓦石にも良知ありといふのは自己の有する良知より推して天地にも草木瓦石にも良知があるといふので實は私の意識活動に外ならぬのである。天地に良知天理があるといふも吾人の意識活動の産物である。草木瓦石にも良知天理があるといふのも吾人の意識活動の産物である。吾人の意識を除いて客觀に良知天理があるべき理はない。その吾人の意識の外に良知天理が存在して居るやうに思ふのは西田氏が「或一種の統一作用によりて統一せられたものである。唯此の現象が普遍的である時、即ち個人の小さな意識以上の統一を保つ時我により獨立せる客觀的世界を見るのみである。」といへると同一の意味である。天地鬼神萬物が千古見在して居るが如く見ゆるのは只吾人の意識活動でそう見ゆるまで、實は天地鬼神萬物は此の如く千古見在してをるのではないのかも知れぬ。天地鬼神萬物が千古見在しおるが如く見ゆる現象が普遍的であるから客觀に存すると思ふまでがある。此の如く



説明し去れば觀念論を以て一貫することが出来るが、此の説が正しいか否かは又別問題に屬することである。然し余は觀念論では到底すべての理を説明することが出来ぬ難點が存するやうに思ふ。故に陽明の説も倫理上の問題を説く時に當りては破綻を見ないが、宇宙問題を論ずる時は直に難點に遭遇するやうである。梁日孚が先儒謂一艸一木。亦皆有<sub>レ</sub>理。不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>察如何。と問ふた時に陽明は夫我則不<sub>レ</sub>暇。公且先去<sub>レ</sub>理<sub>ニ</sub>會自己性情。須<sub>下</sub>能盡<sub>ニ</sub>人之性。然後能盡<sub>レ</sub>物之性<sub>上</sub>。と答へて居るのを見ても知るべきである。且陽明に時々客觀に物の存在を豫想していへるが如き語氣のあるは適に觀念論のみでは到底説き去ることの出来ない所を知らず識らずの間に漏らして居るのであると思ふ。故に余は今日に於ては朱子の實在論の如く主客一致の認識説を取らねばならないではないかと考へるのである。

以上述べた所は極めて大略のものであり且その論法も粗雑で統紀がないので眞の研究と稱するに足るものではないのを愧づる次第である。余の研究したるものは他日整理して發表することにしたいと思ふ。それは朱子王子の外に莊子陸象山及び實在論觀念論に屬する諸家の説をも述べたもので少しく統紀のあるものである。(大正十三年三月初旬又記す)